

研究ノート

# 朝鮮通信使と日本の朝韓侵略

北島平一郎

大阪経済法科大学研究補助金による論稿第九号

目次

(一) 播州室津の港

朝鮮通信使

通信使の宿泊と饗応

港の殷賑

(二) 朝鮮通信使の歴史的意義と問題点

朝鮮通信使接受の態様

朝鮮通信使日本来航の眞意

朝鮮通信使資料の抹殺？と問題点

## (一) 播州室津港

## 朝鮮通信使

朝鮮通信使の概畧は次の如くであった。通信使という名称は対等互恵友好外交という意味であった。

総人数は約五百名、正副使従官からなり、鼓笛隊、旗持ちなどを従えていた。一行は釜山から関門海峡を通って瀬戸内海に入り、牛窓<sup>マド</sup>(岡山県)、播州室の津、鞆の浦等に宿泊した。本船六隻から成った。これらは大阪に船泊まりし、そこで鼓笛隊を先発に正、副使は輿に乗って従者がこれをおかつぎ、夫々の旗をなびかせる隊列を組んで、中仙道を通り名古屋から江戸まで東海道五三次を上った。笛を吹き大太鼓、小太鼓をな打ならし、これにつれて時には踊り乍らのマーチで、沿道は見物の人々が群衆をなした。華やかな一大ページェントであった。この行列は、日本人の絵心をそそり、また記録の為に絵師によつて色々に描き残された。江戸市中を見物衆の中を進む朝鮮通信使の極彩色の絵柄は、サテこれはこの様なものであつたらうと実景を髣髴させる。大阪で現行はれている「ワッソ」は日朝関係の歴史絵巻きの再現であるが、この行列は、朝鮮通信使そのもの、具象化の印象が強い(「郷土の歴史」御津町教育委員会、「室津の歴史」室津追考記抜読、御津町立歴史資料館、「ふれあいのまち大阪」大阪市人権委員会、「光るまち大阪」大阪市人権啓発推進協議会、「四天王寺ワッソ」友情は一四〇〇年の彼方から、「四天王寺ワッソ実行委員会・同世話人会、「わたしな〜ちゃん」同協議会)

通信使の宿泊と饗応

この朝鮮通信使の宿泊と該地に於ける饗応の史、資料が播州室の津（兵庫県御津町室津港）に多く残されている。今般それを筆者なりに調査した結果次の様な結果を得た（一九九九年の一〇月と十一月の二回。兵庫県御津町室津の海駅館と民俗館を中心に調査）。

室津というのは古くからの港で古代より種々の史蹟が残されていてまた代々の文人墨客のここを訪れた人も多く、詩歌、文献、文学等の作品にもこと欠かない。お夏、清十郎も当地のゆかりとされ、その文学も種々ある（「室津と文学」御津町史編集図録Ⅳ）。さきには室津の岬は、つたかづらにおおはれていて、これをそれとみわけることが出来ない程であったが、今を去ること二千年前神武天皇の東征に九州以来その先導をつとめた賀茂建角身命（カモタケツノミノミコト）が室津を訪れ、この有様をみて藤蔦を斧、鉞、鎌の三刃をもつてことごとく切り払い、もつてここに港を開いたという（国指定重要文化財賀茂神社由緒書）。この命は有名な八咫鳥の化身であるというからまったくの神話であるが、これらを架空の物語りとして無下にしりぞけてはならない。神話の解釈、純粹科学的解釈が絶対命題であり、歴史、伝承、伝説と民俗生活のかかはりを考え、究明することこそが純粹科学的・精神でなければならない。この命の孫神に当たるヒトが賀茂別雷命（カモワケイカツチノミコト）で、室津岬に賀茂神社としてまつられ、また京都上賀茂神社にもいつきまつられている。これら斧、鉞、鎌の三つは神宝として奉祀され、神社は毎年五月に小五月祭り（こさつきまつり）という盛大なフェスティバルを催し、これは全町あげて祝はれている。この祭りは大江匠房（オオエノヤヅラフサ）

○四一——一一年）の時代から行はれているという（「室津の祭礼」御津町史編集図録Ⅲ）。

港は海から陸に向かってハート型に喰いこみ、山に囲まれて波静か、鏡の如くで中に入れば室の様であるとされ、

それが古代からの呼び名となった。

### 港の殷賑

室津は早くよりこうして港として又漁港として用いられ(小五月祭りには大きな赤い鯛の出車が出る)発達したが、徳川幕府となつて朝鮮通信使と共に西国大名の参勤交替の宿泊地としてこの頃より殷賑を極めることと成る。即ち九州、四国、中国の諸大名が海路江戸を目ざし、室津が重要な寄港地となつた。薩摩藩、日向飢肥藩、延岡藩、豊后佐伯藩等が常連とされ、諸大名は室津に上陸して宿泊した。これらの諸藩の関札がつくられこれが、本陣や、宿場の出入口にかかげられたが大きなもので、人体の半分位あり黒うるしで名が彫りこんであるが、その二、三がいまに残り、往時のあはたらしい海駅場の面影をうかび上がらせている。普通本陣は一処一ヶ所とされたがここには六軒の本陣があり、海を背にしたその跡が地面に区画として交通標識の様にかきこまれていた。その他オランダ商館が長崎に開かれ(最初は平戸)、商館長が一年一回通商免許のお礼言上として將軍に拝謁しに江戸に上がった。この中のケムペル(Engelbert Kaempfer)、シーボルト(Philipp Franz von Siebold)等医官としてこれに隨行し、日本の地図や風俗人情を克明に誌した日記等を作製したがその中に室津のことがくわしくふれられている(当時日本の地図は門外不出とされたが、彼等はどこからかこれを入手し、シーボルトはこの為国外追放となつた)。

これらの中で朝鮮通信使一行は一きは重要なV. I. P. 賓客として取り扱はれた。それを概観すると次の如くなる。

通信使の来航回数、徳川秀忠から家斉まで前后一二回。

これは家康が豊臣秀吉の印度まで攻めこんで日本の版図をひろげるといふ無智妄想の結果その暴逆の被害を受けた朝鮮のそのきづをすこしでもいやし、国交を回復したいという熱望で友好使節を兩三度と派遣し、これを疑った朝鮮側が使節を中国につれていったりして中々応答しなかつたのが、秀忠將軍の時、慶長一二年（一六〇七年）五月、漸くこの交渉が実を結び、第一回の朝鮮通信使が来日したのであつた。（家康もこのとき大御所として彼等を自ら出迎えている）。家康はいまはやりのグローバリゼーションで東南アジア諸国、カンボヂヤ、安南、ルソン等と接触している。以下の使節来日は次の如くであつた。

年代	年号	將軍	朝鮮国王	年号
一六〇七	慶長 一二	秀忠（家康・大御所）	宣祖	四〇
一六一七	元和 三	秀忠	光海君	九
一六二四	寛永 元	家光	仁祖	二
一六三六		家光	仁祖	九
一六四三		家光	仁祖	二一
一六五五	明暦 元	家綱	孝宗	六
一六八二	天和 二	綱吉	肅宗	八
一七一〇	正徳 元	家宣	肅宗	三七
一七一九	享保 四	吉宗	肅宗	四五
一七四八	寛延 元	家重	英祖	二四
一七六四	明和 元	家治	英祖	四〇
一八一〇	文化 八	家斉	純祖	一一

以上が朝鮮通信使来航の記録であるが、前后一二回に及んでいて、大凡そ將軍の代替りの来日であることがわかる。

その起源は日本側に於いて詳らかにしているが、最終家斉の一八一一年が、どういう理由からか、双方如何なる思惑のもとにこれで以降朝鮮通信使が途絶えたのかこれは何か明白な原因があるのかどうかは、いまずこし研究しなければならぬ。一般的な客觀的事実としてこの頃漸く外来船の日本近海に現れること繁く、幕府も俄かに海防の必要や外敵対策を講じなければならぬとなり、寛政異学の禁(一七九〇)や外国船の戦意あるものの撃攘令(一七九一)、外国船打払い令(一八二五)等が出ている。露艦が度々北方海域にあらはれ、又英船が、常陸、浦賀、琉球等にしきりに来航した。これらから日本が海辺防備におはれて他国にことをかまえるより防衛專一に国是を定めている(これにつき更に後にふれる)ことが明白となり朝鮮側の被侵畧猜疑心がなくなつたことが大きな原因かと考えられる。家斉はこの最後の朝鮮通信使を対馬で応接してことをすませ、このとき朝鮮通信使の江戸参府はなかつた。

## (二) 朝鮮通信使の歴史的意義と問題点

### 朝鮮通信使接受の態様

さきにもふれた如くこの朝鮮通信使接受はすこぶる大がかりなものであつた。これについては室津、牛窓等の記録が残っているが、通信使本船六艘の来航に対し、おむかえの幕府側小艇は一、〇〇〇隻を数えた。その為の幕府側接待用員は、四、五六六人に及んだ。また牛窓の記録によると近隣三村から一、四〇〇隻の小艇が集められ、その接待用員は延九、七〇〇人であつた、とある。如何に交流の規模が壮大なものであつたか、ということである。

尚最も重大なことは朝鮮通信使派遣に要した朝鮮側費用は一〇〇万両という。昭和三〇年代の金額になおして六〇



通信使本膳



通信使二の膳



通信使三の膳・菓子

○億円である。当時幕府の予算は年七五万両であったというから朝鮮通信使のスケールの大きさは瞠目に値する。朝鮮通信使の人数は牛窓、室津等に宿泊したが、室津海駅館にその正使、副使、従官の幹部等に出された膳部の記録があり、それが極彩色の模型として再現されている(写真参照)。本膳は三の膳まであり、それに菓子膳、果物膳がついていた。絢爛豪華なものである。ちなみに宿泊大名に出されたものは二の膳までであり(写真参照)内容は朝鮮通信使膳とくらべものにならない。如何に幕府や人々が朝鮮通信使を大事に扱っていたかが、これ一つみても一目瞭然である。

一つの記録として饗応の内容は、三汁、一五菜、グヂ、アワビ、鴨、エビ、盃、酒、カステラ、饅頭等であった。一回分の料理の素材として白米四升、酒二升、味噌一升五合、醤油六升、酢六升、塩五合、ゴマ五合、これらすべての準備に一年をかけた、とある。

### 朝鮮通信使日本来航の真意

かくまで大規模な朝鮮通信使が如何なる目的で、徳川將軍の代替りに日本を訪れたのかということが問題である。その理由は次の如く考えられる。

(一) 日本政府が豊臣政権の様に再び朝鮮半島侵寇の暴挙に出ないかという危惧からこれを監視する為であった。従って徳川政権の代替りにその恐れがないかを探る目的があったのである。日本を西から江戸まで行列を組んで上る



通信使酒盃・菓子



御上御献立・本陣薩摩屋の大名膳

道々、街々にそういった雰囲気を探索し、空気をかぎとること。その様な恐れがあれば、それは直ちに感得されたであろう。そして直接江戸幕府にのりこんでその政権の政策をさぐるうとしたのであった。このことはその目的としてまことに的をえた、肯綮<sup>コウケイ</sup>に価する事業であった。その正しさは、政権が徳川から明治政府にかわるや否や征韓論が抬頭し、日本の侵畧準備が富国強兵の名の下に達成されるや、有無をいわず秀吉暴挙の再現を企て実行したことから知れる。

徳川家斉十一代將軍のとき、(イ) さきにくれた



日本をとりまく内外情勢と、(ロ) 何次かにわたつて朝鮮通信使往来の間、朝鮮侵襲の気配のなかつたことから、これが中止されたのであつたが、それから半世紀の後に日本の国是が朝鮮中侵襲の實行に定められたのであり、そこで朝鮮通信使の目的と役割が正当化されたことは、かえすがえすも残念なことであつた。あの絢爛豪華な行列をくみ笛をかんで、太鼓を打つて美々しく東海道五三次を江戸に上つた朝鮮通信使のくにを日本人が再び凌辱したという事実を我々日本人はどうかみしめたらいいのであろうか。

(二) 従つて朝鮮側では、日本よりの使節は如何なる形態、機能、目的をもつたものであれ、これを国内に入れていない。すべて釜山にとめおいてそこで機能させ、交渉を処理している。これも歴史上当然のことで、これらの注意も結局明治に入つて効果が無かつたということになるのであるが、かえすがえす残念な事である。

(三) 朝鮮通信使の目的の眞底は右に述べた如くであるが、そのたてまへは、日朝間の文化交流にあつたから、両国間の学者(林羅山とその一派、伊藤仁斉、五山の高僧等)、文人等が江戸で種々接触した。また技芸の面でも一級の人々が通信使にふくまれていて、そのときどきにこれを披露して日本側の讃嘆を博した。これには例えば牛窓で唐子踊りをみせた記録がある。

こうした朝鮮通信使の努力は、これらを日本で披露することにより、また、壮大、華麗な行列をくりひろげることによつて、朝鮮の国家的勢威を日本側に示すことがはかられた為であつた。しかしこれらには資料の裏づけが非常に乏しく、尚朝鮮通信使そのものの記録やその発出の朝鮮側に於ける経緯等に関する資料等も絶無の様で、これらはこれからの資料探索と研究にまたねばならない。しかし朝鮮通信使の巨大な努力も明治以後の日本が朝鮮に加えた暴逆で一片の反古となつてしまつたので、日本敗戦後もこれを取扱うことは史料としてもインカレッズな事ではなさそう

である。

### 朝鮮通信使資料の抹殺？と問題点

朝鮮通信使の歴史に光をあてる場合、まずその関連資料の乏しいことに忽ち逢着する。それは播州室津港に残されたものと岡山県牛窓のそれらが具体的なものである。対馬藩関係以外他にはたいしたものはない如くである。あれだけの年月をかけ、諸々の苦勞をつみ重ねたあの壮麗な朝鮮通信使の記録や資料が室津港と牛窓にしか残されていないという様なことはあり得ることではない。故に当然それら以外の多くの資料はどうなったのか、ないことはない筈の大部のものはどうなったのか。そこでそれらは完全に余すところなく抹殺されたに違いない、という推測が有力に成りたたなければならぬのである。朝鮮を支配しこれを併合するという世界植民地史の中でもまれな無謀な暴擧を敢行する為に、一つの原則として日朝韓友好対等外交の一片の史実もこれを残してはならなかったのであると推測せざるを得ない。支配と従属の関係を確立する為には一片の情け容赦もあつてはならない。これが明治、大正、昭和の植民地主義の国是であつた。故に右の推測も有力に成りたたざるを得ないのである。何を今さらスンダ事を、という声もあるかも知れないが、千丈の堤も蟻の一穴からくずれる如く、すべてに一片の疵瑕もなつてはならない、日朝韓友好の為にはこの志が重要大事であらう。

抹殺の事実、これを証明することは不可能であらうが、朝鮮通信使関係の大部のものが、何も日本にも朝鮮にも残っていないという事実が何としても不可解なのである。例えば大阪に朝鮮通信使関係の事実がないことはない筈で、

朝鮮通信使の大船六艘がその都度入港したのであるから、その事実関係の資料、史料が当然いくらかもあつたと考えられ、それが多く残っていないのはそれらが抹殺されたとか考えられないのである。抹殺は廃仏毀釈の様に政治運動として白日の下に社会的騒擾として実行されることもその必要もなかつたので、明らかでないが、一片の官通達かその監視の下に行はれたのであろう。

特に大阪は明治期以来反徳川の基地の様などころであつたから親徳川の資料等は自らすすんで破却したのであろうか。(一) 大阪は豊臣秀吉びいきで、豊臣政権下五大老の一人であつた徳川家康が卑怯にもこれを裏切つて亡ぼしたということ、反家康感情が強く、「家康をののしる会」という様なものもある(現在は開店休業かも知れない)。(二) 関ヶ原合戦で西国大名が大阪を拠点として西軍が大阪方と呼ばれて揚句、敗北した何となく恨みの感情が強い。(三) 大阪は江戸中央政権から距離も遠く、反中央的色彩も強く例えば、一八三七年の大塩平八郎の乱なども大阪の天満から起つており(天保八年二月一三日)、これにつき大塩を研究する会が一、二あり、それらは今日でも研究活動をつづけてい、大塩の記念祭なども行つていといった様相もある。

以上考えられるところ朝鮮通信使の資料は東京から大阪まで大体に破却され、以西の室津や牛窓に眼こぼしとして残つたであろう。何れにしてもこれら推測の域を出ないが、右の理由からしてこの推測には強い信憑性が與へられるのである(室津海駅館には大凡そ六〇冊の朝鮮通信使の文献が集められている)。

尚大阪では文中の資料としてかかげた如く日朝鮮関係友好のより一層の発展を願つて天王寺ワツソをはじめ様々の催しや会合に努力している(鶴橋に大きな朝鮮の人々の居住地区があることは、その点では日本一という事実もあ

る。

最後に、室津について一言ふれておかねばならぬことがある。それはここが日本の遊女の発祥の地として有名であったことである。その一の遊女は「室君」として美才徳を備えた理想の女性像に描かれ、今日でも先述の小五月祭にはその偶像が参加し、それは地元の高校女子生徒によつてその役割が演じられている。更に室津からんで「友君」伝説もあり、それは一人の遊女が室津に於て法然上人に身の悪業をなげき、訴え、上人から悉皆成仏の法話を得て得度し、山中に庵を結んで念仏の中に遷化したというのである。この女性を室津の「友君」として遊女をはじめ人々がまつり「友君の像」（浮雲寺）、「友君の厨子」等がつくられたのであった。またこの女人は木曾義仲の愛妾山吹御前であったともいう。室津に大名をはじめ人々が蝟集し股賑を極めたので遊女が参集し廓が出来て一層その盛大が成就されたのであるが江戸期廓は吉原、京の島原、長崎の丸山と二五ヶ所が官許で、室津は廓番附西の八枚目ということである。しかしそこには大名にはべる為特別高等の遊女が養われていた、という。

何れにしても何かあるとすぐにこういった廓や遊女の話が出て、日本文化もまことに貧寒たるものである。江戸吉原を舞台にして、歌舞伎、浮世絵、洒落本、浄瑠璃と遊里と遊女を題材にした演劇、文学、美術が盛行し、これがすぐれた世界的文化であるとして日本が誇る唯一の芸術となつていたのであるから事は相当に深刻であるが、ストリート・レディズはどこにも出没するとしてこういった女性を一割にとじこめて男性の性の玩具に供していたというのは恐らく日本だけではなからうか、少なくとも東洋の現象の中の最右翼であろう。これが昭和三三年まで続いていた。それについては浮世絵や江戸文学、文学浄瑠璃のことは話題になるが、女性を性対象のおもちゃにしていたという認

識や発想は全くない。キリスト教国からみれば破天荒な文化度であろう。  
室津についても「室君」や「友君」伝説もそういった廓文化から脱却した認識の下に語られるべきであろうと思う。

